



# HARVARD | BUSINESS | SCHOOL

## Funai Overseas Scholarship 第4回報告書

武田悠作

ハーバード大学経営大学院 組織行動学科

[www.hbs.edu/ytakeda](http://www.hbs.edu/ytakeda)

1/5/2018

博士課程に進学してから早くも3セメスターが経過し、2年目も折り返し地点を過ぎた。ある程度学者としての生活にも徐々に慣れてきて、非常に充実した毎日を送っている。本年度の終わりには博士学生から博士候補へと進むための試験があるので、現在はその試験勉強として経営学、特に経営管理や組織行動や経済社会学関連の論文を読む日々を送っている。肝心の研究は、現在2つのプロジェクトに特に精を注いでいる。こちらは長期戦であるため、継続は力なりと信じて、毎日コツコツと取り組むことに努めている。



8月にアトランタで行われた世界経営学学会の開会式とレセプションの様子。レセプションでは水族館が丸ごと貸切られ、巨大なパーティー会場として使用された。

### コースワーク

今学期は、研究手法のセミナーを中心に3単位分のコースワークを終わらせた。面白いことに、ハーバード大学で提供されているクラスは一つも履修せず、MITとボストン大学 (Boston College) で時間の大半を費やした。具体的には、計量研究法のセミナーはMITで、質的研究法と組織論のセミナーをボストン大学で履修した。それに加えて、単位は出なかったが、非公式でハーバード経営大学院の名物教授と定期的なリーディングセッションをお願いして設けてもらった。

### 計量研究法 (Applied Quantitative Research Methods Seminar)

昨年ハーバードで履修した計量研究法の発展的内容を網羅したセミナー。今回はスケジュールの都合上、ハーバードではなく、MITで履修した。発展的な内容でありながら、研究手法の研究・発展専門の教授ではなく使用者側にあたる教授が担当し、彼の経験に基づいた手法の応用が強調された。セミナーというだけあり、レクチャー形式ではなく、様々な手法やその基礎となっている統計的な理論についての論文や教科書を読んだ。それを実際に使った経営学の論文も読み、その論文の良い点や悪い点について議論した。それに加えて、学生は週ごとに学んだ手法を自分のデータを用いて練習することが求められ、その分析結果をセミナーで発表し、他の生徒や教授からフィードバックをもらう。私は、後述する現在進行中のプロジェクトから採取したデータを様々な形式に変換し、新しいデータをわざわざ宿題のために探すことなく学期を終えることができた。その週のカバーする手法に合わせてデータ形式の変換をしたり、解釈を変えたりするのは、その手法の本質や弱点等を本当の意味で理解する上でも有用だったと思う。

さらに、計量研究の様々な手法を応用の観点から学べたことは大きい。実際の論文出版にあたっての査読者としての視点、厳しい審査を乗り越えられる論文を書くテクニックなども学んだ。教科書からでは学べない裏技的なテクニックや、教授の経験に基づいた学術誌別の傾向と対策などが非常にためになった。

### **質的研究法 (Qualitative Research Methods Seminar)**

先学期から頻繁に出入りしているボストン大学での、質的研究の世界的権威である教授によるセミナー。このセミナーでも、MITと同じく、現場の傾向と対策を数多く学ぶことができた。特に、競争率の高い学術誌への出版に向けた傾向と対策においては、質的研究法ならではのテクニックや、学術誌で実際の編集者としての成功・失敗例などを直接学ぶことができたのは大きい。余談だが、彼が飼っている2匹の犬とも非常に仲良くなることができた。

### **組織論 (Macro-Organization Theory Seminar)**

同じくボストン大学で履修。先学期に社会認知論を受講した、現世界経営学会会長の教授による組織論のセミナー。組織論セミナーは先学期にハーバードでも履修したが、やはり教授ごとに重要な文献やその解釈等が異なるので、組織論の学者として様々な視点を学ぶために履修した。課題として、その週の題材となる主要文献の理論を用いて自分なりの研究企画を書くことを課せられた。そのため、文献を読むのをできるだけ早く終わらせて、企画書の内容を考えて書き起こす必要があったため、合計でかなり時間を費やした。その分学ぶものは多かった。

### **非公式なリーディングセッション**

ハーバード経営大学院のイノベーションや技術管理の文献に置ける名物教授との一対一の議論。私の専門分野でありながら、該当するセミナー等が提供されていなかった

ため、教授に直談判して定期的に主要論文に関して議論する時間を設けてもらった。組織論やイノベーション論の様々なシラバスから興味のある論文を5 - 10本選び、それについて議論した。1対1の議論で論文の深いところまで議論するのは案外難しい。本来ならコメントをくれたり、様々な視点を持ってきてくれたりするクラスメートがいない分、「盛り上がった」議論がなかなかできないからだ。最終的に具体的な議論をするために、自分の研究にからめた形で議論する形式になった。結果的に一番の収穫は教授とよく知り合えたことだ。彼には、博士論文のコミティーにメンバーとして加わってもらう予定だ。

## 研究

一橋大学院での研究員時代から継続している幾つかの副業的な研究プロジェクトを除けば、主に2つの研究プロジェクトに取り組んでいる。一つは学部時代の卒業論文の内容をきっかけとした、ヤマハ株式会社とヤマハ発動機の歴史的経験に基づいた組織変革と文化的要素の関連性についての研究である。研究手法は今学期学んだ内容をうまく活用して、計量的・質的研究法両方の要素を含んでいる。

もう一つのプロジェクトは、経営大学院で仲の良い助教授と今年入学してきた後輩にあたる博士学生との共同での組織的同一性（アイデンティティ）とイノベーションの関連性についての研究だ。デザインコンサルティング会社のクライアントを対象として、観察、インタビュー、ミーティングの録音、サーベイ等を使いデータ収集し、比較ケース分析をしている。現在、パイロット調査として最初のクライアントプロジェクトからのデータ採取が終了したところだ。こちらも、計量的・質的手法両方を見据えてデータ採取を行っているが、私自身は特にサーベイを用いた計量的分析を主に担当している。とはいうものの、実際に現地に出向いてプロジェクト観察をしたり、メンバーやクライアントにインタビューをしたりといった実際に経営に携わっている人々との直接的な関わりもあり、学術的な内容以外にも非常に勉強になっている。現在は、パイロット調査で採取したデータを分析し、サーベイ等の性能の向上を図っている。



先日 磐田市のヤマハ発動機本社を訪問した。素晴らしい展示品の数々。

### 研究者として思うこと：執着心の重要性

最近少し衝撃的な出来事があった。ボストン大学の博士課程に在籍していた学生が、家族と立ち上げたビジネスに専念するため自主退学をしたのだ。彼のアドバイザーは私自身も非常にお世話になっている教授で、彼自身の研究トピックも私自身のそれに近かった。また、年上ではあるが私と同じウェズリアン大学出身だったために共通の話題も多く、特に親近感を抱いていた。この先お互い学者として切磋琢磨しあうような長い付き合いになると思っていただけに、その同志が学者の道を諦めたのは驚きであった。彼は、ハーバードの同級生にも負けるとも劣らない実力があるし、アドバイザーたちもハーバードに劣らない重鎮教授ばかりで、実力的・環境的な面で辞める理由はなかったはずだ。

にもかかわらず、彼がなぜ経営学者の道を諦めるに至ったのか。真相は本人にはかわからないが、彼と私も含めた博士課程でのここまでの経験に満足しているような者との間の決定的な違いは「執着心」だと思う。学者として成功している教授を見ていると、能力的なところよりも、研究対象への執着心に圧倒される。自分の研究の話をするだけで笑みが止まらないような、少し狂気的なものだ。私自身も、研究に関する話をするときは、狂気じみているとか、「よくそんなどうでも良さそうなことを毎日楽しそうに考えてられるね」といったようなことを言われることがある。しかし、その狂気的な



執着心こそが学者職業の生命線なのではないか。職業である分、従わなくてはいけない学問の発展と関係のない規範や風習などもあるから、それらに対する不信感や懐疑感から、ときには技術的または表層的な事に注意がいつってしまう事もある。また、多くの研究は実際に実るまでに何年もかかる事もあるし、その研究が認められるかどうかはわからない。下手をすると自己満足で終わってしまうかもしれない。でも、だからこそ、根の部分での自分の分野と研究に対する強い執着心が必要なのだと思う。私自身も初心を忘れず、少年のような心で日々精進していきたいと思う次第だ。



今学期から、14年間練習してきた柔道に本格的に復帰した。柔道への執着心も増し、毎週数回は2時間の練習に通い精進している。最近新しい感覚もつかめてきて楽しい。